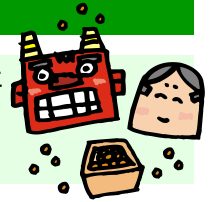


- 初年次教育を改めて考える
- FD活動報告
- スタッフからひとこと

初年次教育を改めて考える

「初年次教育」という言葉を知らない大学関係者はおそらく皆無であろうと思われるほどに、この10年間に「初年次教育」は急速に普及しました。今一度、初年次教育とは何か、何を目的としているのか、そして初年次教育が真に力を発揮するのはどういう場面なのかを整理し、見直したいと思います。



初年次教育とは、高校から大学への円滑な移行を促すため、必要な諸経験を踏ませることであり、初年次を対象とした授業科目群を整備することではない。

初年次教育は、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」（川嶋2006, p.3）と定義されますが、「初年次教育」の元の英語は、First-Year EducationではなくFirst-Year Experienceであることに注意が必要です。初年次教育の意味するところは学生の「初年次の経験」であって、特にアメリカで実践されているのは、学問や学習面で大学に適応するために必要なことを大学側から学生に教えるというよりも、「教室内外で包括的・総合的に大学への移行を円滑に促すため、大学がそれを意図的に支援する」（川嶋2006, pp.4-5）というものです。

高校から大学への移行を体系的に促すために、アメリカの大学では、学生が高校を卒業した時点から大学への入学まで、そして2年次に無事進級するまでを連続的にとらえ、それぞれの段階で必要なプログラムを体系的に提供しています。このプログラムのなかで授業として提供されるものは、前期に開講される初年次セミナー1科目くらいです。オリエンテーションや寮生活など、その他のものはすべて授業外あるいは教室外で行われ、初年次セミナーや他の授業ベースの活動と関連付けられてデザインされています。したがって、たとえば外国語や教養科目を全体の何割教えれば初年次の移行が促される、といったことは全くないのです。

初年次教育のもっとも重要な実践は、高校と大学の断絶を、学生が自分自身の力で乗り越える応援をすることである。

アメリカの初年次教育が力を注ぐのは、高校と大学

の断絶を、学生が自分自身の力で乗り越えるための支援を効果的に提供することであり、高校と大学の学校段階に存在する断絶や困難を消してならし、学生がなだらかな道を歩けるようにするものではありません。

「支援をする」ということは応援し励ますことであり、学生が受けるべき試練や関門は原則として存在します。アメリカでも大学入学時点での選別が機能しなくなっているため、以前は存在していた高校と大学の間にある障壁を越えずに、学生が大学にやってきます。障壁を越えていないならば、大学入学後にその障壁を越えさせることが求められますが（荒井, 2011）、それを初年次教育が提供するわけです。学生は学問的にも社会的にも精神的にも成長することを強いられますが、すべての面で適応するために、方向付けられ、練習し、成功をするまでの一連の「経験」を大学は用意します。学生は断絶に直面し戸惑いながらも、励まされると同時にシビアに評価される仕組みの中に置かれることで、実際に努力をし（「エンゲージメント」と呼ばれる）、その結果、初年次を乗り越えていきます。教員中心主義から学生中心主義へ、また、教授から学習へ、という一大発想転換は、学生に努力させることを貫く、この「独特の哲学とペダゴジー」（濱名, 2006, p.247）によって起こったものでありましょう。学生がやる気を出して奮起し、努力をする（エンゲージする）という「経験」を提供する仕組みは、それぞれの初年次プログラムの中に埋め込まれており、そのゴールは、初年次生がドロップアウトをせずに2年次に進級することに焦点化されているのです。

大学卒業後のドロップアウトと大学における「障壁」の効用



アメリカの大学では、GPAが一定の値を下回ると初年次終了時点で退学処分を受けます。初年次でのドロップアウト率を下げることは大きな課題で、リテンション（2年次への進級率）は80～85%前後が目標として設定されています。アメリカの大学において、初

年次の高い障壁がはっきりと学生に見えているわけですが、一方で、日本の大学における中退率はアメリカに比べて低く、学生が障壁を越えるという課題が学生にも我々教職員にとっても、喫緊の課題としては立ち上がってきません。しかし、日本においてアメリカの中退率と同様に扱うべきであるのが、大学卒業後の進路未決定者と短期離職者の割合です。濱名（2006）はいくつかの統計を組み合わせて、たとえば「社会科学分野や人文科学分野では卒業生の5割近くがフリーターのような不安定雇用やニートを経験する可能性がある」と推計しています。これに中退者を加えると、社会科学分野や人文科学分野に入学した学生の「6割以上が、大学入学の18歳から卒業後3年の25歳までの7年以内に『進路挫折』（キャリア選択で大幅な軌道修正や挫折）を経験する」（濱名、2006、pp.248-249）ことになるのです。

学生が越えるべき対象であった、「断絶」「壁」としての大学入試が多くの大学で消滅した今、学生の多くは大学入学を決める際に人生の選択をしていません。そして選択の先送りの結果は、日本の場合、大学卒業後に顕在化することになり、社会全体がその代償を払うことになるのです。学力も意欲も欠ける学生を多く抱える大学の困難は大きくなるばかりですが、かといって高度な知識基盤社会では、進学しないという進路行動は、とりもなおさずその若者の人生にとってやはり不利に働きます。大学の教職員が、大学には学生が越えるべき「壁」があることをまずは前向きに受け入れ、毅然としてそれを学生に課し、愛情をもって

共に歩く必要があると思いますし、それが学生を一人前にするための教育であるように思います。

学生から努力を引き出す

アメリカの初年次教育を輸入する過程において、日本の学生研究は飛躍的に発展し、多くの成果が蓄積されました。これらの研究によって、アメリカの学生研究によって指摘され提案されていることは、基本的に日本の学生にも当てはまるということが明らかになってきました。それぞれのキャンパスに在籍している学生の構成やそこで実効力のある初年次教育のありかたが多様であるように、日本の高等教育の文脈もアメリカとは異なり、各大学の事情もそれぞれで多様ではありますが、原則は学生のエンゲージメント（＝努力）を引き出すこと（小方、2008）であり、アメリカも日本も共通しています。学生の努力を引き出す要因はいくつかありますが、最も重要なものの1つが、教員と学生の良好な関係です。そしてこれは、信州大学の強さとして誇れるものになると思います。

（文責：加藤善子）

引用文献：
 荒井克弘（2011）「高大接続の日本的構造」『高等教育研究』第14集、pp.7-21。
 小方直幸（2008）「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』第11集、pp.45-64。
 濱名篤（2006）「日本における初年次教育の可能性と課題」濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』丸善、pp.245-262。
 川嶋太津夫（2006）「初年次教育の意味と意義」濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』丸善、pp.1-12。



活動報告

12月に各部局で行われた多数のFD・SDにおいて、高等教育研究センターの教員が講師を務めました。開催報告は高等教育研究センターのウェブサイトでご覧いただけます。



▲12月21日医学部附属病院での看護師研修の様子



▲12月27日繊維学部でのFDの様子

開催日	部局名	テーマ	参加人数	講師
12月4日(火)	理学部	現代の学生をめぐる状況と、信大および理学部の学生の特徴-新入生調査(2011)のデータを中心に	33	加藤 善子 准教授
12月14日(金)	農学部	教育におけるICT活用に関するFD講習会 (e-Learningセンターとの共催)	7	矢部 正之 教授 長谷川 理 助教※ (※e-Learningセンター)
12月18日(火)	全学教育機構	「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会答申)について	41	加藤 鈺三 教授
12月18日(火)	医学部	医学部附属病院看護管理者研修	55	加藤 善子 准教授
12月21日(金)	附属病院	「看護管理者のリーダーシップを考える」	33	
12月27日(木)	繊維学部	「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会答申)について	31	加藤 鈺三 教授

スタッフからひとこと

「出口」と言えば就職状況でした。今後はそれに加え、「この学科で勉強すると〇〇ができるようになる」という意味での出口が重視されます。しかし慌てる必要はありません。先生方が、ご自分が信じる授業の効果を日々口にだしていただければ大丈夫です。

（教授 加藤鈺三）

